

1850年～1870年代イギリス労働者階級の人々

Working-class people in Britain 1850-1870

亀塚 智章

Kamezuka Chisho

〈目 次〉

- 1 はじめに
- 2 時代背景
- 3 都市労働者たちの生活形態
- 4 おわりに

1 はじめに

ヴィクトリア中期といわれる1850年～1870年、世界に先駆けて産業革命を成し遂げた工業国イギリスが世界の頂点に立つ経済的躍進期を迎える。この間GNPは年平均3～7%⁽¹⁾以上の成長を続け、物価も5%⁽²⁾ずつ上昇し続けた。輸出品の市場価格が約4倍⁽³⁾に値上がり、海外貿易はUSAの3倍強⁽⁴⁾に、国民の実質収入が10～15%増加した⁽⁵⁾という。急速な経済の拡大と繁栄には、時代を問わず常に光と影がつきものである。大きな経済成長は収入の増大、生活水準の向上による新興中流層の著しい台頭を促す一方、さまざまな歪み、矛盾を生み出した。

その背景に、貧困労働者層の大量移入により引き起こされた社会的な問題がある。18世紀中頃イギリスの総人口の4分の3が貧困労働者層といわれ、富と安定を求めて都市部に流入する若い労働者が産業革命以後増大していく。1851年までにはこうした労働者を含めた都市居住者（2万人以上の都市や周辺の町）は、イングランド、ウエールズでは総人口の58%⁽⁶⁾に上る。またこの時代すでに全都市部、周辺地域の居住者はイギリス総人口の51%⁽⁷⁾を占めるに至った。アイルランドからの大量移入はリバプールで総人口の22%（1841年）、1840年代後半、農業恐慌を背景に移入者の増大はロンドンではすでに10万人以上（1851年当時のロンドンの人口は200万人以上、1861年約300万人、1880年400万人へと膨れ上がっていく）、1861年にはイングランド、ウエールズでは総人口の3%、60万2,000人を占めた。⁽⁸⁾ 彼らの大半が低い身分の不熟練労働者層で、貧困、失業、治安の悪化など社会不安の増大要素の背景となった。

またこれに連鎖して個人や家族に関わる問題が表面化し始める。収入面、労働条件など労働者間や職種間の格差が1850年代から大きく浮上してくる。拡大していく富の格

差と生活環境の悪化は、1860年～1870年にかけてさらに顕著になっていく。移入人口増大は雇用需要のインバランスを生み、貧困と失業の不安は地元の若者（特に男子）の流出現象を引き起こしていく。そこにはおのずから、過剰人口になりつつあった若い女性たちの直面する問題が露呈していく。結婚か自立かといった選択肢しかなかった労働者階級の女性たちにとって、未来は必ずしも開かれたものではなかった。自立するだけの家庭環境も社会環境もほとんどなかったからである。そこにまた、家庭と繁栄する経済社会との摩擦やあきれつが強くなっていく。社会が及ぼす弊害や矛盾は、貧富の拡大によって一気に表面化していく。こうした富めるもの貧しきものの格差拡大といった深刻な社会問題に、ディズレーリが「二つの国民」と警鐘を鳴らし、繁栄する社会に内在していく国民の危機的な分裂意識を予見していたこともよく知られている。

ここでは階級社会イギリスが迎えた大きな時代変容を背景に、社会的要素や基準、価値観に左右されながら生き抜いたイギリス下層労働者階級の人々の生活形態を、社会的側面（所得の構造）から追ってみたい。

2 時代背景

1851年～1871年にかけてのイギリスの就業者人口（労働者階級男女）と主要職種に関するデータ⁽⁹⁾を取り上げてみよう。

1851年の総職業労働（従事）者（男女）は970万人。（以下成人男子）①農業179万人②織物108万人③鉄工業、機械運輸（鉄道、レールなどの鉄製品製造の需要大と新興工業都市の拡大によるもの。都市移住者に不熟練労働者が多い。）53万人④建設49.6万人⑤運輸43.3万人⑥炭坑38.3万人

1861年の総職業労働者（男女）1,008万人。①178万人②102万人③75万人④59.3万人⑤57.9万人⑥45.7万人

1871年の総職業労働者（男女）1,200万人。①163万人
②98万人③87万人④71.2万人⑤65.4万人⑥51.7万人

（以下成人女子）1851年①家事，個人奉仕113.5万人②
織物63.5万人③衣服（衣類）49.1万人④専門職10.3万人
⑤食品，飲料関係5.3万人

1861年①140.7万人②67.6万人③59.6万人④12.6万人⑤7.1
万人

1871年①167.8万人②72.6万人③59.4万人④15.2万人⑤7.8
万人

成人男子の場合，1851年では655.4万人が何らかの職業
に従事する一方で，104.1万人（約5分の1）が非職，無
職，失業にあった。これは1861年には727.1万人（同
105.4万人），1871年には818.2万人（同116.9万人）へと
増大していく。また成人女子の場合1851年281.9万人の
職業従事者に対し同519.2万人，1861年325.2万人（同
576.2万人），1871年357万人（同653.5万人）が示されて
いる。⁽¹⁰⁾これは単純に比率化すると成人女子約801万人
に対し非職，無職，失業率は約64.8%（1851年），約901
万人に対し約63.95%（1861年），約1,010万人に対し約
64.7%（1871年）となる。このデータでは示されていない
が，都市部と地方では家族形態や労働条件が違っており，
北部ヨークシャーのような綿織物産業地域では，地元と
いう比較的恵まれた環境下で働ける女子労働者が多く
いた一方で，農村部で生活にあえぐ多くの下層労働者も
多くいた（1850年代20歳以上のイギリス人の4分の1が
農地で働いていた⁽¹¹⁾）。またロンドンのような大都市部
では，一般商いで3人に1人は安定雇用されていたといわれ
るが，特に労働供給過剰と過酷な労働条件にあえぐ女子
労働者が多くいたのも事実である。

1851年イギリスの中産階級は人口の1割以下（事務員
などの下層中産階級を含めても総人口の2割）で，そのう
ち約50%は商業従事者，残り25%が農業従事者，25%が専
門職，行政，工業従事者であり，以後の経済繁栄の鍵を
握っていたのは36万人に満たなかった⁽¹²⁾という。そし
てその下に準熟練労働者と不熟練労働者の大きな2つの階
級層がある。これらの階級層が当時のイギリス労働者階
級の大半を占めていたのである。商業従事者の一角を占
める熟練労働者は，たとえば1830年前後の労働者の週給
欄でみることができるよう，長期の徒弟修業を経て特
殊技能を有する職人（工）であり，この時代ではまだ他
職種業との大きな賃金格差がみられていない。

毛織物職工（手織機）……15～18シリング

毛織物紡績工ジュニー精紡機（女子）…11～12シリング

ミュール精紡機（男子）…24～26シリング

染色工……16～18シリング

大工……23～24シリング

石工……23～26シリング

ブーツ，短靴作り……21～23シリング

徒弟奉公を終えた仕立屋……21～26シリング

炭坑夫……16～18シリング

農業労働者……9～10シリング

農業以外の一般労働者……13～15シリング

（中西敏一、『イギリス文学と監獄』開文社出版，1991年，
174～175頁からの抜粋引用）

こうした熟練労働者は週1ポンド以上を稼ぎ，年収にし
て50～90ポンド（1ポンド＝20シリング），伝統的な勞
働貴族の一端を占めた。この下にくる準熟練労働者と不
熟練労働者は無学層が多く，年収も50ポンド以下といわ
れる。1835年代，14歳以下の子供が紡績工場の労働力の
13%を占めていた⁽¹³⁾ともいわれ，こうした子供や家庭を
抱える準熟練と不熟練労働者の多くが，製造工業を中心
とする産業経済の重要な労働源をとっていた。1803年
～1867年ではイギリスの世帯数は200万から600万へと
増加する一方で，労働者階級は100万から450万世帯へと
増加。貧民はこの間26万から60万人へと大幅に増加する
事態⁽¹⁴⁾になっている。

また都市部やその周辺地域では鍛冶屋，仕立屋，靴屋，
婦人帽子，針子など製品製造と販売に従事するものが多
く，集中する製造工業による労働者人口はイギリスの就
業労働者の3分1にも達している。⁽¹⁵⁾その多くが手職人
といわれる下層労働者（準熟練工，不熟練工）に他なら
ない。R. D. Altickは，19世紀初頭の労働者を取り巻く社
会的背景を次のように概説している。

工場制の始まりは18世紀。手職人とその家族がその住
居で出来高払いの仕事をし，原料は雇用者が供給するシ
ステムを取った。次第に何人かの職人が雇用者と並んで
仕事をする町工房へと変わる。19世紀になると蒸気機関
が導入され，労働者住宅の集まる小さな共同体に隣接す
る同じく小さな工場が蒸気を動力源として，鉄，石炭，
安価な大人，子供労働者の供給源に近いところの大規模
工場にとって代わられていく。1830年代イギリスはその
ころ原料綿を他の商品よりも多く輸入，綿製品は最大の
輸出品であり，国家経済中心の産業となっている。ヴィ
クトリア初，中期全産業をまとめてもイギリス労働人口
中最多は相変わらず手職人であり，都市ではなく小さな
町に住んでいた。工場労働者は大都市においても少数派
であった。手職人と区別される工場働いていた「職工」
は産業従事者の半分を占めた。綿工場も1850年になっ
ても工場働いているのは，労働者数の半分にも満たな
かった。あとは昔ながらの手職人。雇用は不安定，賃金も
低く抑えられていたのである。⁽¹⁶⁾

1865年代に入ると，賃金上昇によって週に2ポンドを

得る⁽¹⁷⁾ 熟練工も目立ってきた。家具職人、時計職人などこの時期に工業化に左右されない伝統的な技能職人たちである。1880年代でも、週25シリング以下の稼ぎしかない成人男子労働者が労働者全体の約6割を占めており、3割が週25～35シリングを稼ぎ、充実した労働階級の快適さを楽しんでいたという報告⁽¹⁸⁾もある。残りの1割強がさらに豊かな経済力を背景に、工業化が進むにつれて新しいより高い技術力の要求される社会へ主導権を握っていくのである。

労働貴族は多くの産業に散在して見られる。短期需要における従来の熟練工や職工、建設、製陶、印刷、製本といった業種、また新しい業種（造船、エンジニアリング、製鉄）などであり、彼らの基本給は週35シリング、またはそれ以上といわれた。⁽¹⁹⁾

工業化の進展に伴って、富裕化の拡大がイギリスの伝統的価値体系においても重要な意味を持っていた。階級という言葉がヴィクトリア朝の社会や経済体制を特徴づける基準として、産業の発展に伴う所得形態の違いによって作り出された概念であるがゆえに、労働者層では、社会的上昇やより豊かな消費生活が階級化意識と必然的に関わっていたのである。

労働者層の大半を占める準熟練、不熟練労働者の中でも、家族の価値、自分の安定、絶えず社会的上昇を目指す人々の間では、貧しい階層に再び落ちたくないという意識が、その生活形態を大きく左右していた。そうした人々が19世紀イギリス社会の下層中流階級層であり、1850年以降の新興中流階級に食い込んでくる人々である。中流層の仲間入りとは、社会的地位と収入と生活形態がその大きな条件を満たす要素であった。

1850年代以降の経済の伸長が社会階級の仕組みを伸長させていくことになるが、それが労働者全般、特に下層労働者階級に必ずしも有利に働いたわけではない。1851年～1871年のイギリスの就業人口のデータ（前述）が示しているように、無職、失業者は増加の一途を歩んでいる。また女性労働者の場合は3人中2人近くがこの状況に置かれている。さらにこの下層労働者グループの下に統計に表れない、善意に依存して命をつないでいた貧者、浮浪者、その底辺では犯罪者の大きな層があった（『オリバー・ツイスト』（1836）に描かれる社会がその参考となる）。

ヴィクトリア中期イギリスを支えた富は、商人、産業経営者、銀行家、法律家、小売店主といった新興中流階級が作り上げた富である。John Burnettによれば、1851年非手職人を基本にした成人男子数がすでに125万人（総労働人口の18%）、また約10万人の教師、約55万の小売業者や物売り（街頭売り）、4万4,000人の商業事務員、8

万6,000人の全支店の資本運用の製造業者（工場主）がいたという。こうしたグループが階級のダイナミックな主導要素を作り、上層労働者階級から低専門職、政府事務職、低俗事業にいたるまで急速に拡大していくと指摘⁽²⁰⁾している（1851年～1881年間に取引主の下で働く人々だけで、39%の人口増に比べて69%増大している）。

多様な職種は1860年に入りさらに増え続けていく。1850年代すでに急成長を遂げる職種が多くみられ、Burnettは、拡大する富裕層と地位的には中流層に仲間入りした低所得の事務員との驚くような職業所得格差例をここで具体的に紹介している。

上級法廷弁護士（年収）5,000ポンド（1850年）／人気ある医者1,000～2,000ポンド／150人の従業員を抱える石鹼工場主15,000～17,000ポンド（1851年）／Burnley綿工場の下級事務員（週）8シリング7ペンス／事務員10シリング9ペンス／上級事務員（15年連続勤務）21シリング（事務員は朝7時～午後6時まで働き、勤勉の証となる服装をして冬には毎日4lbの石炭を持参する。）⁽²¹⁾

1860年から1870年にかけて事務員数は4倍、商業従事者は1871年に労働人口の8%、公共行政職は44%（商業従事者の半数以上に）、運輸関係は8%（商業従事者と同等比率）へと総就業人口比率の大幅な伸びを示し⁽²²⁾、他方困い込みの犠牲となった農業労働者人口の半数以上は、すでに季節労働者として占められていた（1850年）。ロンドンでは移入者を含め、季節労働者が（臨時、季節/ファッション、天候などに左右されていたが）1851年あたりでは都市（ロンドン）の全職業人口の3分の1⁽²³⁾を占めている。また商いは出張作業も一般的であった。

19世紀中期、自分で収入を得る女性たちはイングランドでは約1割。家内工業、針仕事、家事、個人奉仕などが蔓延していたことは前述のデータでみることができる。地方で労働者階級の重要な経済活動、いわゆるペニー資本といわれる小売業（安いサービスを売り物にした巡回配達）が現れてくるのは19世紀末になってからである。ロンドンのような大都市では、かなり以前から低層労働者間でも活発な経済活動がいたるところで起きていた、と想像はできる。しかしそのような経済環境があったにせよ、依然として厳しい生活にさらされた労働者が多くいたという事実に大きな変化はない。

所得形態という点で、1860年代のロンドンの労働者（1日10時間労働）のケースを別の資料でさらに取り上げてみよう。

1860年代中期ロンドンの一般労働者（1日）3シリング9ペンス／穴掘り作業員（自分で長靴を調達）（1日）4シリング6ペンス／レンガ工、大工、石工、鍛冶屋（工）（1日）6シリング6ペンス／技術工（エンジニア）（1日）7

シリング6ペンス（年収110ポンド、週で2ポンド5シリング、都市部の若い女召使の年収の約10倍）／馬車郵便護衛（週）10シリング+チップ／電報業務事務員（女）（週）8シリング／ロンドン居住職人（週）36シリング／ロンドン居住労働者（週）20シリング／農業人夫（週）14シリング／船員（週）15シリング⁽²⁴⁾

1850年中期の中流階級の平均年収は、150ポンドから1,000ポンド（今日の3万ドル～20万ドルに相当）といわれる。職種や都市部という利点によって、ごく少数派に属する中流層事務員もこうした資料記録から窺うことができる。Arthur Haywardによるある上級事務員（1844年）の年間予算は当時の専門職という新興中流層の典型的な事例（Burnleyの事務員と比較すればいかに裕福か）でなかろうか。それにしても年収150ポンド（中流の最低限収入とみなされた）で家賃の占める比率がかなり高い。（一般的に収入の約1～1.5割が中流層の上限の目安となっていた）。家賃の高さは、中流階級としての自負と見栄があらわに出ている端的な例といえる。それは同時に、仕事が非常に安定していることも証明している（衣服費や洗濯代の高さが目立っているのも、清潔さが中流階級の大きな特徴の一つであったからである）。

借家25ポンド／税5ポンド／召使7ポンド／石炭5トン6ポンド5シリング／ろうそく、薪（燃料）2ポンド／お茶7ポンド16シリング6ペンス／砂糖6ポンド14シリング2ペンス／バター、卵9ポンド12シリング／肉18ポンド6シリング／魚2ポンド／野菜5ポンド／ビール6ポンド10シリング／洗濯女（食事を含む）、石鹸6ポンド13シリング／アイロン1ポンド／衣類（衣服）23ポンド6シリング／教会、チャリティ3ポンド10シリング／医者（医療費）5ポンド／雑費1ポンド8シリング／娯楽1ポンド19シリング4ペンス／貯金6ポンド⁽²⁵⁾

1870年以降、職種の多様化はホワイトカラー給与労働者の増大を促した。これまで小売業者、商店主など商業中心で占められていた下層中産階級内のバランスが、大きく変化していくのである。給与労働者は社会的上昇を求め、また中産階級社会を下から脅かす脅威を吸収する、保守社会の防波堤としての役目を果たしたのである。そして従来の中産階級からは成り上がりものとして嫌われる立場に置かれ、他方下層労働階級からは尊敬の対象とはならなかったのである。社会上昇志向の強い労働者の増大、経済の悪化、労働市場の供給過剰、彼らの事務労働技能の狭い特殊性、教育を受けた女子労働者や外国人労働者といった安い賃金労働者の増大など、下層中流層を取り巻くさまざまな問題が生じていく。しかし1870年代以前までは、平均的事務員はBurnley綿工場の事務員のように、低賃金労働者⁽²⁶⁾そのものであった。

急成長を遂げていくホワイトカラー労働者層は、低層労働者の生活底辺の底上げに貢献した。ホワイトカラー労働者の増加は、19世紀末のイギリスの帝国主義的国際経済構造の成長の中で支えられた。金融、流通の重要性が増大、男子労働者人口の占める地域性は、行政、商業の中心地エジンバラ、マンチェスター、リバプール、アバディーン、ブリストル、ニューカスル、グラスゴー、ハルなど流通経済の重要な都市に占める比率の高さなどでも指摘されているところである。⁽²⁷⁾

1870年代年収50～100ポンド以下の下層事務員が多かった。彼らは社会的地位を何よりも優先した。事務員とかホワイトカラー族という言葉の背後に、職業上の地位や安定した所得（表面上、下層労働者や他の下層中流層からそのようにみられたいという）に関する、はなはなましい差異が依然として隠されていたからである。中流階級への憧れが強い一方で、実現不可能な所得環境の中で、社会的、道徳的意味において中流階級の生活形態を模倣することで自分たちを肉体労働者（下層労働者）と一線を引き、その属する階級の差別化を計ったのである。それはいうまでもなく品位を重んずるという習慣的価値観であり、中流層の伝統的価値観の模倣に過ぎなかったのである。

3 都市労働者たちの生活形態

急速な経済成長は雇用増大を生む一方で、労働市場の需給関係の中で職種における雇用や生活形態の格差が生じてくる。賃金格差は1850年代では熟練、不熟練労働者間においては顕著な例であり、それは当然のように労働者たちの衣食住に反映されてくる。また職業の多様化も、教育を受ける機会を与えられた下層中流層の子供たちに有利に働く、拡大する都市経済システムの特徴である。事務員職も、中流家庭の教育を受けてきた若者に開かれた職種であった。

不熟練労働者が低賃金による過酷な労働条件の下で、貧しい生活を強いられたのはいうまでもない。それでも下層労働者の子供たちは、商店主、職人（工）の見習いなど、下層中産階級者の下で職を得ることで自立の道を開いた。しかし特に若い女子層には、自ら収入を得る社会的自立の道は非常に限られていたのである。前述の統計でみたように、農業を除く1851年代主要職種（男女）の2位を占めているのは家事奉仕業であり、1871年以後も増大していく職種である。教育を受ける機会がなく下層労働者層に属した都市部の若い女子に開かれていたのが召使である。通説として、1851年代のロンドンでは女子就業人口の1割が召使であり、その賃金についても年10ポンドといわれている。階級社会につきものである召

使は男女を問わない職種であり、上流家庭や新興中流家庭によって賃金や労働条件に格差があるのは事実である。村岡健次は19世紀中期以降の女召使（住み込み）の賃金について、次のように紹介している。

ロンドンの女召使／19歳の仲働き（年）12ポンド／25歳の女中（年）17ポンド／30歳の女主人付女中（年）28ポンド／40歳家政頭（年）34ポンド⁽²⁸⁾

またHayward（上級事務員の年間家計予算を参照）の資料が示すように、中産階級といえども召使を多く抱えているわけではないことが窺えてくる。社会的地位に欠かせない中流の条件の一つに、召使を持つことが階級社会の通念であった時代であることを考えれば、平均的下層中産階級（新興中流階級）では経済的余裕があったわけでもなく、虚栄心の働いた召使雇用がその大半を占めていたと思われる。しかも低所得層の代表的格としてその賃金内容と召使の数だけが強調されて、当時雇用関係に置かれた召使の労働実態が具体的レベルで紹介されたものは多くない。

Anne McClintockの「帝国の革ひも」下（『思想』5、岩波書店、1998、93-115頁）は、その意味で1860年代の下層労働者の典型としての召使の生活（労働）実態を具体的に紹介した例であろう。McClintockはフェミニズムという視点を通して、余暇時間と中流のフェティシズムというキーワードで見えない重労働に自ら拘束されていく、当時の中流家庭妻の例を考察している。またそこで自己存在を失いかけた召使が、日々機械的に靴磨き、料理、家掃除に自分の依拠空間を見出す、市場商品としての姿を刺激的に紹介している。

新興下層中流階級の著しい台頭は、召使雇用の増大につながった。また女性過剰時代であったから、特に職を求める下層労働者階級の若い女たちは巷にあふれていたのである。この召使の日記からは、物のようにこき使われ使い捨てられる立場にあった召使の生活の一面が、弱者の過酷な生活実態を暗示しているように見える。安い労働力として必死に生き延びる人々があふれる中で、この労働力を最大限に活用して、見かけだけでも中流に食い込もうとする、下層中流家庭の涙ぐましいほどの努力と上昇への競争意識が、消費欲にあおられ労働者階級全般に瀰漫していく俗物階級意識として、はびこっていくのがこの時代の特徴でもあった。安い労働力は、確実に下層中流労働者層のより豊かな生活の実現に貢献していく。

都市部やその周辺の大きな町に働く労働者にとって、賃金や労働環境が彼らの生活基盤を大きく左右することはいうまでもない。工業の発展は地域の急激な都市化を進め、人々の生活習慣を大きく変容させた。以下 Burnett

は次のように概説する。

すでに人口が大幅に増えていた1850年代の新興工業都市（マンチェスター、バーミンガム、リーズ、シェフィールドは人口が3倍に、グラスゴー、アバディーンは4倍に、ブラッドフォードは8倍に達した）では、大量に送り込まれてくる製造、鉄鋼、建設労働者（大半が不熟練労働者）は生活環境においてさまざまな問題に直面した。あふれる人口、非衛生な居住、逃れられない新しい生活形態、日々必要なものを十分に供給するだけの機能やシステムすら出来上がっていない人口だけが膨らみ続ける町。労働者にとって、食料、衣類、燃料、家賃は現金払いでなければならなかった。商品価格の推移が生活水準やゆとりの目安になったのである。⁽²⁹⁾

食料価格は人口増大の市場（都市部）に反映され上昇する（1850年～1870年物価上昇は年平均5%といわれるが、新興都市では物価上昇率はさらに高かったのではないか）。では労働者の賃金はどうだったのか。膨張する都市化現象においては、一般労働者の賃金は大都市も中都市も大差はなかったのである。Porterの1860年代のロンドンの一般労働者賃金（前述資料）が示すように、3シリング6ペンス（1日10時間、週6日）（単純計算でいくと週22.5シリング／月4ポンド10シリング）から従来のレンガ工、大工、石工、鍛冶屋（工）の週39シリング（月7ポンド16シリング）、特殊技術工（エンジニア）の年収110ポンドと比較すれば1.5～2倍の格差があったことになる。1860年代後半ロンドン居住労働者の週20シリング（1ポンド）の稼ぎは、他の地方工業都市でも手仕事の基本となっている（不熟練労働者ではない）労働者（たとえば1860年代中ごろ綿工場などで働く労働者）に見られる稼ぎと同額である（1850年～1870年の間に10～15%平均で実質賃金が上がっていることにも注意）。しかし物価高や家賃の上昇など、家族が食べていくだけで精一杯ではなかったか。

こうした年収50ポンドに満たない労働者層が準熟練労働者⁽³⁰⁾たちであって、その下に不熟練労働者の大きな層があった。1867年までには労働者階級は450万世帯（イギリスの総世帯数は600万）に増加。貧民も60万人へと大幅に増加していくのである（前述参照）。

ここで都市部層の労働者（夫の稼ぎ、週約1ポンド）の生活⁽³¹⁾をちょっと覗いてみよう。妻と3～4人の子供を持ちすべてを夫の週給に頼る労働者階級家族では、夫は毎日肉、ベーコンにありつけたが、妻、子供たちは週に一度だったという（おそらく給料日か休日（日）と思われる）。夫に十分な食事を与えるために妻と子供たちは習慣的に我慢をしたという例や、夫を亡くした低収入層の女たち（綿工場に働く女たちでさえ）が、ジャムや蜜を

つけたパンやお茶で生活をしのいでいたという例は別に珍しいことではなかったのである。D. J. Oddyによる労働者階級家族予算（一週間の食糧消費）（1863年）⁽³²⁾では肉は、0.9ポンド（1ポンド＝0.45kg）（一般地方、工業都市を含む）で小さな町（0.8ポンド）や田舎の労働者家族（0.9ポンド）と変わりはない。差が見られるのはパンやポテト消費が田舎では若干多い程度である。（工業都市を含む一般地方／パン10.9ポンド、ポテト3.9ポンド、砂糖7オンス（1オンス＝28.35g）、脂肪5.1オンス、牛乳1.4パイント（1パイント＝0.57ℓ）

しかし一人平均（1日当たり）摂取量は2,600キロカロリーとなっており、現代人の平均摂取キロカロリーと比べても遜色はないという。時代的には輸入食品が出まわったり、カロリーの高い代替食品（都市部における人口甘味ジャム、いわしの缶詰などの流行食品）が手ごろな値段で買った労働者たちも多くいたし、食品消費が急激に拡大していく背景がある。また農村部では1850年代中期までには、食事の質は落ちていたが、1862年の農業労働者の食事内容の調査によるとこの時期の最貧層でも成人男子一日当たり2,700キロカロリーの食事をしていたという報告もある（Alan Macfarlane, 『イギリスと日本』, 2001年, 新曜社（邦訳）, 91頁参照）。貧しい農業労働者にはバター、ラード、チーズ（これらは貴重品であった）は食事における唯一の脂肪源、蛋白源であった。また18世紀の貧困層は、パン、わずかなチーズ、薄めたお茶が主食であった。1830年代イングランドの食生活はみすばらしく悪化したというが、それでも貧困層の一人当たりの日常食品消費量が1940年のインドの1人当たりの生産量の2倍あったという。

1830年代31世帯のうち27世帯の食事には肉か魚が含まれ、家計費に肉が含まれない4世帯のうち、労働者（男）の3人は雇用主から食べ物を支給されており、彼らもおそらく肉を食べることができたという指摘もある（『イギリスと日本』, 同94頁参照）。

M. Andersonが紹介しているある特定地生まれのグループを対称にした調査報告⁽³³⁾をみると、1830年代の平均寿命は44歳（男）、47歳（女）は1861年代では50歳、57歳と大幅に伸びている。また下層労働者階級は依然として子供の数が多く、4人以上が下層では約1割を占めている（1870年～1900年）。19世紀最初の30年間の死亡率の低下（これは生活改善が進んでいったことと、天然痘ワクチンの導入が背景にある）をみたが、それにかかわらず1歳前後で死亡する子供の比率が高い推移で続いている。

またある特定地生まれの乳幼児グループ調査資料⁽³⁴⁾では、1歳までの男児死亡率は1831年の16%（14%女児）

1861年16%（15%女児）1891年17%（15%女児）と一定して高く、5歳までの死亡率は同28%（同25%）、27%（同24%）、25%（同22%）と非常に高く推移している。この高い死亡率は、次表で5～9歳児（男女）においても、イングランド、ウェールズなどの総人口の約6割を都市住民で占める地域でもみることができる。

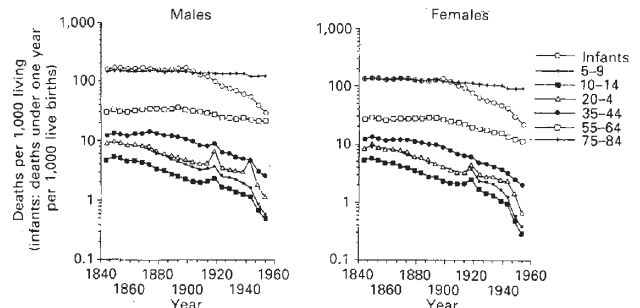


Figure 1.3 Changing age-specific mortality, England and Wales, 1841-1960
Sources: Annual Reports of the Registrar General for England and Wales.

（出典）（M. Anderson, Ibid., p. 17.）

これは経済繁栄に拘わらず、依然として特に下層労働者階級の食環境が向上していないことも示している。1830年代下層労働者階級では食生活は貧しかった。それでも一人当たりの一日平均摂取量は1890年代とほぼ似ている（約2,200～2,300キロカロリー）。

1890年代前後の場合、労働者社会全体の生活水準が向上しており、10歳以上の年齢層全体の死亡率も低下し始めていることが上の表でみることができる。また20代（男女）の死亡率の下降の背景の一つに、イングランド、ウェールズ人の3分の2に当たる若者（特に男子）がより豊かな生活を求めて流出していた経緯があり、経済の衰退と外国人労働者の増加など、複雑な要因が低層労働者の生活環境悪化を誘引している背景がある。その点、1830年代の食糧環境や1890年代の経済環境が、1860年代の食糧、経済環境事情とは異なっているように見える。衣食住は乳幼児の成長に大きく関係する。では1830年代、1890年代の食糧事情、経済事情とは異なった、1860年代中ごろの乳幼児の死亡率の高さの背景とは具体的に何であったのか。この点に関し19世紀中葉のイギリスの平均的準熟練（賃金工）労働者家族の生計予算（Burnett資料より）⁽³⁵⁾を取り上げ、参考材料に当ててみたい。

① 19世紀中葉の都市部の正規雇用の準熟練工の場合

1841年の3人の子供を抱えた、夫だけの収入の典型的都市準熟練工家族（週15シリング）。

5 (4lb. loaves at 8.5d.)	3s.6.5d
5lb. of meat at 5d.	2s.1d
7 pints of porter at 2d.	1s.2d
0.5 cwt coals	9.5d
40lb. potatoes	1s.4d
3oz. tea, 1lb. sugar	1s.6d

1lb. butter	9d
0.5lb. soap, 0.5lb. candles	6.5d
Rent	2s.6d
Schooling	4d
Sundries	5.5d
total	15s.0d

② 19世紀中葉の地方都市の典型的準熟練工（ランカスターの綿織工の場合）5人の子供を抱えた（年代不詳）、夫だけの収入の平均的家族（週25シリング）。

Butter, 1.5lb.	1s.3d
Tea, 1.5oz.	4.5d
Bread baked at home	4s.6d
Oatmeal, 0.5peck	6.5d
Bacon, 1.5lb.	9d
Potatoes, 40lb.	1s.4d
Milk, 7quarts	1s.9d
Meat, 1lb. (Sundays)	7d
Sugar, 1.5lb.	9d
Pepper, mustard, salt etc.	3d
Soap and candles	1s.0d
Coals, 1bushel.	3s.6d
total	18s.1d

①の家族について／Burnettは、安い肉、ビール、新鮮な野菜、ミルクが食卓に見られず、食費が全収入の7割強を占めていることを指摘し、また2部屋の家賃住宅、学費4ペンスが学校へ通う幼い2人（女子）のための出費とみている。またこの食費形態で占められるパン、ポテトの比率が、同日付資料の機械工、見習い工（週16シリング）の生計費における食費形態とほとんど変わらないことを示唆している。②の家族について／Burnettがここで注目しているのは、ここに出てこない週6シリング余りの残金であり、衣服、教育費、病気などの予備費とみている。また低家賃、低価格の石炭（北部地方の利点）、主食、ミルクのウェートが南部より高い点、そしてこの家族の大きな特徴が、食費を収入の半分以下に抑えていることによる栄養摂取量の不足と食品バランスの悪さであることを指摘している。

その他Burnett資料による北部居住の7人家族（週18シリング6ペンス）などをみても共通しているのは、食費の収入における比率の高さと食品の偏りであり、デンプン類を中心に肉類、ミルク、チーズが抑えられ、わずかな量のベーコン、お茶といった内容が、準熟練労働者家族の一般的生計における標準的食形態として窺える。これは1850年代全般の都市周辺労働者層（準熟練、不熟練）においても大きく異なっているようにみえない。Porter

など注(24)資料による1860年代のロンドン居住労働者／週20シリングの収入家族を平均とみても（毎年の物価上昇率は加算されていないことに注意）、むしろ生活そのものがより苦しくなっているとみても妥当ではなからうか。また収入の乏しい地方の農業労働者家族（1843年）（週13シリング9ペンス／夫9シリング、妻9ペンス、子供（12歳）週2シリング、11歳週1シリング、8歳週1シリングとその他2人の幼児）（Burnett資料より）⁽³⁶⁾では、肉食品がみえておらず、バター、チーズといった蛋白源も家族数からみてかなり少ない。総支出13シリング9ペンスのうち主食のパンだけで64%支出、ポテト消費を併せて10シリングを費やしている。また家賃はパン9シリングの次にくる支出（1シリング2ペンス）となっている。

こうした貧困農業労働者の生活形態が、1860年代の経済繁栄の恩恵にこうむっているとは考えにくい。1840年代囲い込み制の拡大が農業労働者の暮らしを悪化させ、自営農ヨーマンが借地農になるか、不熟練労働者の境遇に陥るかその選択しかなかった時代であった。1850年代20歳以上のイギリス人の4分の1が農地で働いていた。また1861年の統計（前述資料参照）では農業労働者人口（男子）は大きく変動していないが、家族を扶養するため都会へ移入することが困難になった稼ぎ頭や幼い子供たち家族といった、選択を失った人々が多くいたことが想像できる。ただ1日1人当たりの平均摂取量が現代人に匹敵するというこの通説は、単純に考えると一見矛盾しているようにもみえる。これらの資料では表面化しない食糧事情も多いはずである。収入の大半が食費に回り、稼ぎ頭や労働の担い手となる子供（男）中心の食料配分構成の家族が多く、家族を背後から支える、女たち（妻や少女）の不十分な食糧事情が表面化しないケースが十分考えられるからだ。1863年こうした労働者家庭の食生活が、急に改善されたとみるのはどこか不自然である。だが同時にロンドンでは、1850年代都市部労働者がまずまずの食生活をしていたともいう。1850年代のロンドンではすでに多くの行商人がいたし、町々では沢山の小さな店があった。妻たちはわずかな額で野菜やその日に家族が食べる食料（パブや飲み屋でパンで挟んだ揚げ魚を一つ）を買ったりして、冴えない食事をにぎやかにする努力をしていたケースもありふれていた。

農業労働者のケースはどうだったのか。囲い込み制の拡大により、地主たちはさらに低層労働者を安い労働源として利潤の一層の効率化を計っていく。この意味では買い手市場の農業地域の労働者の生活環境は、都市部の下層階級労働者の置かれたそれとは構造的には変わっていないと考えられる。ただし表面に出てこない、地主雇

用者と被雇用者の従来からの雇用関係が生む利点もあった（農業地域では、社会的基準や価値観を体制的に支配してきた封建的秩序の雇用関係が依然として維持されていたため、下層農業労働者に対する慈善は、伝統的中産階級としての地主資本家の体制維持の一環でもあった）。ときに雇用主からの臨時の食料調達や古着の配布などがあり、住み込みで衣食住をかりうじて保障された都市部の召使の立場とそうした共通点を持つ。しかし彼らの生活環境はBurnett資料でみる限り、むしろ悪化していると考えられる。無職、失業の増大の影響は都市だけの現象ではなかった。

では都市部の下層労働者家庭は、どのように生活をしていっていたのか。Burnettの熟練工資料の紹介にいくつかの示唆がある。19世紀の労働者の収入や支出が残っている背景に、正直な家族生活に自信を持って聖職者や地域監督者に彼ら自身の個人的部分を告げた人々の存在をBurnettは挙げている。しかも読み書き教育を十分受けてきた熟練工家族の生計資料の中には、真面目で努力家の習慣を生活信条とし、社会的にも「敬われる、尊敬される」立場にあるという見栄や階級意識による偏見が、見えない部分の支出を意図的に省いた記録などがみられるという。夫の飲酒癖、ギャンブル、娯楽、妻の借金といった支出記録に計上されてこない負担が食費を大幅に圧迫し、高収入の熟練工の中でも、生活苦に追われやりくりをこなし多くの家族が20世紀初頭にいた、という事例⁽⁵⁷⁾がここで紹介されている。

このような事例は時代の違いはあっても、珍しい現象とは思われない。熟練労働者層の中で記録になるものは、むしろ低層労働者層社会の中では、やりくりという意味では一般化していたと考えるほうが自然である。1850年代すでに大都市では多くの行商人がいたわけだし、近親者や仲間といった人的関係も、町の中では新しい経済環境を生み出しては違いない。そこでは資料記録には載らない相互依存関係が、たとえば食料交換や衣類の貸し借り、ささやかな臨時所得の機会や一時借金など、融通のきくコミュニティ社会が妻（女たち）の目にみえない大きな役割を通して生活のやりくりを支え、彼らの食糧事情や経済事情に大きく反映されていたのではないか。1880年代それぞれの地域では、質屋が地域経済の潤滑的役割を果たしていることを考えれば、低層労働者階級間のしたたかな生計術がかなり以前から一般化していたことを想像するのはたやすい。大都市ロンドンでは、1860年代でも多くの浮浪層や、犯罪組織集団などに巻き込まれ底辺に生きる人々もいた。底辺で生きる彼らの生活形態にある共有意識（悪玉に搾取されながらも仲間と助け合いながらしぶとく生き抜く）も、それによく似たもの

ではなかったか。

こうした下層労働者層の生活形態が、前述のデータの一根拠を支えると考えられないか。所得に表れない労働者家庭のやりくりが、彼らの食糧事情に反映されていたという見方をするので、稼ぎ頭の食生活の比較的高い摂取カロリーに反映されない、家族の見えない食の実態を読み取ることができるのではなからうか。依然として妻や子供たちの食生活を犠牲にして成り立っている生活環境、そこに1860年初頭の幼児死亡率の高さの一因をみることができる。さらに次の点も重要である。Burnettから引用した家族①、②で気づくように、標準的労働者家庭の家計予算では、衣類購入や病気などに対応できる余裕がほとんどない状態を示している。家族②の例では、食費を切り詰めて他の支出項目に備えている。夫が稼ぎ頭の賃金労働者家庭は必ずしも収入が安定していなかった。稼ぎ頭が病気になることは、家族の崩壊を意味することに近いものであった。医療保険制度もない当時は、医療費の負担は非常に大きい。病人がすでに死亡か死にかけているときにのみ、医者が呼ばれることが一般化していた。ゆとりのない生活、病気の蔓延しやすい環境、バランスの悪い貧しい食生活、病弱になった親や片親になった子供たちの労働者家族も多量にいたはずであり、特に低層家族の乳幼児の犠牲を生む背景に結びついていたと思われる。

さらに悪い環境下に置かれた底辺層世帯では（この表に反映されているかどうか不明）、栄養不良や病気は家族全体がつねに直面する問題であった。1840年代後半には、ロンドンではコレラなどの病気が蔓延しており、生活環境は経済繁栄とは裏腹に悪化の一途を辿っていく。ロンドンのスラム街が地形的に生活排水と産業廃棄物であふれかえりやすい低地にあり、1860年代になっても都市環境がいかに悪化状態にあったか想像しやすい。1890年代になっても乳幼児の死亡率が高いのは、乳幼児の健康維持に適していない生活形態を送らざるを得なかった労働者家族が、いかに多くいたかを示すものであろう（19世紀末になって大人の死亡率が低下するに連れ幼児や子供の死亡率も減少し始める。これは感染病減少が食事内容の改善に関わっているという見方もある）。

蛇足ではあるが、参考までに地方の中流家庭で育ったC.ブロンテの自伝的要素の強い作品『ジェイン・エア』（1848年）から、ローウッド時代のジェインの身辺食品（10歳～18歳）を取り上げてみる。1830年代、1840年～1850年代の地方の下層中産労働者層の子供たちの食生活、また都市部の下層労働者階級（家庭）の食生活を少し立ち止まって想像するのも面白いと思う。

ジェインは親戚を通じて慈善学校の生徒として学校給

食を経験し、最後には同校の年収15ポンド(週約5シリング5ペンス)の教師となっている。この時代に学校教育を受けることのできる子供は中流層に属していたが、作品で暴露された寄宿学校の教育や生活環境の劣悪さは当時の読者層(ほとんどが中流層)に驚きを与えたともいわれる。作中のジェインの週で割った給与は、1830年前後の都市部の労働者層と比較すれば非常に見劣りしている。ただ食事の中にコーヒーやチーズ、ケーキ(材料に卵が入っているとすれば、かなりぜいたく品と考えられる。1856年のT.カーライル家の食卓にみられる卵は1個1ペンス。1850年代の下層労働者階級家庭の食卓には卵がみられない。)などを口にしていて、劣悪であっても教育を受けていることなど地方ではれっきとした中流層に入る。ささやかな年棒(年俸制は中流身分の証でもある)とはいえ、扶養する家族のいない職業を持った当時の若い独身女性として、自立するキャリアウーマンとして比較的恵まれていたのではなかったか。

オートケーキ、焦げた粥、パンとチーズ、ジャガイモと腐ったような肉の煮込み、黒パン、コーヒー、冷肉とパン、バタ付きパン、お茶にトースト、シードケーキ⁽³⁸⁾

下層労働者の増大は当然ながら住環境の悪化を促進させる。多くの労働者にとって住居とは借家を意味した。19世紀を通じて借家需要は高まり、家賃と賃金のギャップが拡大していく現状があったのである。一般的に労働者階級は個人の家主に家賃を支払った。この家賃は土地代、道路、建物代であるが、都市部の土地が高騰し家賃が追従していく。

1840年のリーズでは、1万7,800軒の労働者階級の約半数が週2～4シリングの家賃を、また残りの半数の半分が4シリング以上の家賃を払っていたという。ロンドンでは、1900年の1部屋家賃は週2シリング9ペンス。2部屋家賃は4シリング9ペンス。3部屋家賃は約6シリング。マンチェスターでは、1834年～1836年では、6,900軒が週4シリング、4,900軒が2シリング6ペンス～3シリング、3,600軒が1シリング6ペンス～2シリングの借家住まいだった。都市部居住家族はこのレベルで部屋を借らなければならなかった。週1ポンド以下の労働者(19世紀末の最低所得者)はヨークでは平均3シリング3ペンスの家賃を払い、ロンドンでは週5シリング3ペンスの家賃を払っている。貧困な労働者家族では、週家賃は平均収入の29%にも達している(Burnett資料より)⁽³⁹⁾という。家賃負担は都市労働者にとって生計を大きく圧迫していたのである。

そこで都市部のこうした住宅事情の背景を、都市労働者との関係の中で大雑把に捉えてみよう。1850年代までに、人口増加の結果として大きな建設ブームが社会的現

象として起きてくる。工業地域では、労働者用に大きくなる都市のスラム街地域に賃貸用の家々が乱立して増加していく。こうした借家に2つのタイプがあった。1戸建てタイプと片側だけ隣家と壁を共有した2軒1棟タイプ、またはテラスハウスといわれる壁で仕切られて集合住宅であり、集合住宅は都市、郊外へと増加していったのである。そして集合住宅は19世紀までに都市住宅の基準となり、ロンドンやマンチェスターの熟練工の狭苦しい住家として広がっていく。こうした2つのタイプの借家は、外観や構造の統一性という点で特徴を持ち、今日イギリスの都市生活を象徴する一般的な住居として認識されている。他方田舎では大邸宅建設の需要が高まっていく。建設業界は富裕末端に家屋の供給で繁栄したのである。

賃貸借家の特徴である薄い壁や簡単なレンガ、木材造りで外側は箱のように丸出し、内側は狭苦しいが使いやすい空間のパターン化された部屋。こうした部屋は逆に労働者階級市場で、多様な空間、部屋サイズ、質や量的装飾を可能にしたのである(部屋を借りた住人が、それぞれ生活のため室内装飾するのが習慣であった)。家の値打ちはその年の借り賃で反映され、家の購入価格の1割で賃貸するのが相場であった。⁽⁴⁰⁾ロンドンではほとんどの居住建物は貸家として成り立っていたのである。不動産使用の建物は、熟練工の労働環境や建設機材供給といった整った社会基盤の中で最大限に活用されていたからである。建設供給は大きな成長産業であり、運河や鉄道の発達に伴って供給を拡大し、大量生産、大量消費の中で産業従事者(熟練工)と都市地主資本主義者(家地主など)に繁栄をもたらしたのである。

4 おわりに

ここでは時代背景を中心に、低層労働者の生活をありふれた視点から考えてみた。ヴィクトリア朝の労働者階級社会についてはこれまで多くの考察がなされている。そうした考察をさらに展開させ、新たなものを見出し論証していくことは非常に難しい。多くの優れた先達が積み重ねてきた大きな足跡にこの小論も支えられている。

19世紀中ごろのイギリス社会を眺めていく過程で、素朴な疑問に出会った。当時のイギリス社会の方向性に影響を与えた人々の、労働者に対する社会的視点、生活環境の視点についてである。

1860年後半～1870年前半、新政府(明治政府)誕生前後の日本にイギリスから観光を含めた人々も訪れている。その多くは知識中流層である。彼らは共通した日本発見の一つとして、田園地域や都市部が共有する「美しさ」と「清潔さ」をあげている。外国人の目に映ったこの美しい、清潔な日本とは何を暗示していたのか。当時世界

の工場として世界をリードした国からきた知識層は、野蛮な国のものめずらしい風景を通じて自国の優位を感じ取っていたのだろうか。それとも自然と融和した人々の素朴な生活風景の中に、ある種のノスタルジヤを感じ取ったのだろうか。いずれにしてもその反応の裏側に、繁栄がもたらした大きな代償への思いが潜在している。

19世紀中葉のイギリスでは、経済繁栄が労働者の生活環境を悪化させたことはいろんな例で知ることができる。急激な人口の増大、工場建設に伴う大量の移動労働者、それだけを見ても住環境がいかに大きな問題になりつつあったか想像できる。大量消費や環境汚染は、都市化が急激に進み大きく変貌するイギリス社会の特徴の一つである。一方政治機構は、これまでの貴族地主資本中心という上下両院の旧態的政治体制の中で、1870年にいたるまで支配権を握っていた。階級社会が、社会の変化に対応できる社会資本の充実に手を染めることを怠ったのである。「清潔さ」を証にする豊かな中流階級の人々さえも、社会機構や低層社会全体の生活環境には無関心だったのである。こうした無関心さは（無視というべきかもしれない）、当時社会的影響力を及ぼした知識人にも当てはまったといわなければならない。社会の抱える問題をスノバリズムという観点から、社会改革を論じたラスキンやカーライルもそして下層労働者たちに同情を示したW.モリスも、本当の意味で多数派労働者の目線まで降りてくることはなかった、と筆者は考える。当時の知識層は社会批判を繰り返したが、その背景には社会の多数派を占める低層労働者の社会的、文化的、政治的影響力の台頭を恐れていたふしがある。たとえばモリスは、1890年代の労働者階級に広がりつつあった大衆音楽と産業資本に俗物根性にされた庶民を、“The Society of Future”の中で揶揄⁽⁴¹⁾している。知識人が社会秩序に影響を与えてきた1850年代の社会文化の構造変化を、危機的に読みとった一例ともいえるのではないか。1850年代、貧しいものの生活改善としての衛生改善を主張したディケンズは、病気蔓延が階級を超えた問題であること十分認めていた。また国政の怠慢を指摘していた。しかし彼の衛生改善の目的の背景には、クリミア戦争における自国兵の悲惨な衛生状態にイギリスの将来の繁栄を危惧し、敵国を倒すことと見えない敵病気に打ち勝つこと、そのための団結した社会的調和による社会体制（階級支配）の維持による環境対策の視点があった。⁽⁴²⁾ その意味では彼もまた下層労働者の目線に重ねた社会生活環境の実現を望んでいたかどうか疑問である。

1850年代以降鉄道の発達が目ざましくなる。国内主要線の複線化も始まったが、新興中流の地位を象徴する、とされた自家用馬車は19世紀末まで増え続けていく。都

市環境汚染にはそうした背景もある。囲い込み制が導入されなかった時代の農村部や、囲い込み制が終了した時代の農業地域のイギリスでは、農産物の生産も高く国内全体の食料自給に事欠かなかったのである。大量の家畜は豊かな肥料をもたらした。たとえば農業地域には有益であった馬糞は大都会で何をもたらしただろうか。この問題は、何百万人を抱える大きな都市の人々の営みの形態に大きく当てはまる。排水ばかりではない。下水道の進展を19世紀末近くまで待たなければならなかった大都市で、排泄物はどう処理されたのか。人々の排泄処理の実態が、環境汚染との絡みで非常に深刻な問題であったに違いない。19世紀イギリス社会で人糞が肥料や廃棄サイクル物として活用されたという報告例を目にしたことはないが、毎日何（十）トンにも上る巨大化する都市の人糞や異臭汚染に、当時の多くの知識人たちはなぜいとも簡単に目をつぶったのだろうか。

産業廃棄物についても、知識層はスラム街の問題と絡めて取り上げるに留まったのである。社会の改善を主張した人々も、貧しいものの立場を理解した人気作家ディケンズも快適な中流生活を過ごしたに違いない。大都市では土地や住宅は高嶺の花であった。資金のある中流階級以上の人々でない限り住宅を持つことはできなかったし、上流家庭や貴族家庭社会が田舎で邸宅を構えたように、郊外で1戸建てを持つことが中流階級の証になったのである。そのため、発展途上にある郊外に移住できる環境になかった都市部の中流階級層は、借家を利用するのが一般的だった。すでに述べたが家賃制度が都市部で家主の懐をうるおわせ、また建設、水道、室内装飾などの多くの熟練労働者が住居の改修に腕を競ったのである。ロンドンでは、1850年代こうした人々が経済活動の主導権を握っていたのである。

19世紀中期イギリス社会にはさまざまな問題が表れている。ここでは論じなかった衣食住の具体的な内容も重要であろう。またここでは触れなかった3分の2近くの職を持たなかった女性たちの選択した生活形態や、イギリス社会に見られる非婚、未婚女性の比率の高さの原因、寡婦（夫）や再婚社会として発達していたイギリスの歴史的背景、労働やレジャーに関わる問題、階級と中流知識層が生み出す文化的弊害など、ヴィクトリア朝は限りないほどの問題を抱えた社会でもあった。矛盾と活力が複雑に幾重にも絡まっているヴィクトリア朝社会。そこにまた、歴史的に大きく息づいた社会と人々の生活の重みを感じることができる。

注：

- (1) John Burnett, *A History of the Cost of Living* (Gregg Revivals, 1993), p. 191 参照。1850年～1900年間の平均数値が約3%で、1850年～1870年間の厳密な数値ではない。A. D. Altick 『ヴィクトリア朝の人と思想』, 15頁によると、1851年の国民総収入が1881年までには2倍になっているという指摘があるから、年7～8%平均のG.N.P.に近かったかもしれない。
- (2) たとえば村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1995年, 172頁でも言及されている。
- (3) R. D. Altick, 『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店(邦訳), 1998年, 14頁。
- (4) Sir Robert Ensor, *England 1870-1914* (Oxford: Clarendon Press, 1992), p. 104. 1870年の海外貿易額(UK 54,700万ポンド, France 22,700万ポンド, Germany 21,200万ポンド, U.S. 16,500万ポンド)より算出した。
- (5) R. D. Altick, 前掲書, 15頁。
- (6) M. Anderson, *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950 Vol. II*, ed. F. M. L. Thompson (Cambridge UP, 1990, 以下 *CHB* と略), p. 5.
- (7) J. P. Brown, 『十九世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社(邦訳), 1987年, 50頁。
- (8) M. Anderson, *Ibid.*, pp. 6-7.
- (9) P. Joyce, *CHB*, p. 133 の図表より抜粋作成している。
- (10) *Ibid.*, pp. 133-34 を参照。
- (11) R. D. Altick, 前掲書, 44頁。
- (12) J. Burnett, *Ibid.*, p. 193.
- (13) J. P. Brown, 前掲書, 50頁。
- (14) 同 50頁。
- (15) J. Burnett, *Ibid.*, p. 193.
- (16) R. D. Altick, 前掲書, 45-46頁を参照。
- (17) Leone Levi の指摘, J. Burnett からの引用, *Ibid.*, p. 253. (1867年～1871年の一般労働者の平均賃金は週10シリング6ペンスだという。p. 250.)
- (18) J. Burnett, *Ibid.*, pp. 249-53 を参照。
- (19) *Ibid.*, pp. 251-53 を参照。
- (20) *Ibid.*, p. 232.
- (21) *Ibid.*, pp. 233-34.
- (22) *Ibid.*, p. 194.
- (23) P. Joyce, *Ibid.*, p. 144.
- (24) Wages, the Cost of Living, Contemporary Equivalents to Victorian Money (<http://65.107.211.206/economics/wages.html>, 02/10/07) より引用。職人は季節、需要供給の市場経済に左右される賃金形態に置かれている。準熟練工、熟練工といえども所得においては不安定な職種であり、その年間所得を資料から安易に算出すべきではないと考えている。ただ彼らは売り手市場にいるため、本文の別の部分で所得概算の比較の目安として取り上げてみた。
- D. H. Porter からの資料引用は, *The Thames Embankment* (The Univ. of Akron Press, 1998), p. 176.
- (25) (24) による Arthur Hayward の資料紹介からの抜粋引用。
- (26) J. Burnett, *Ibid.*, p. 234. この事務員本人は中流層と思っているが、周りの人々から見てこの事務員が中流層に属していたかどうか疑わしいという。それでも輸入品、既製衣類、家具などが技術革新で買いやすい値段になっており、ささやかながら並の収入だったという。
- (27) たとえば Geoffrey Crossick, 『イギリス下層中産階級の社会史』法律文化社(邦訳), 1997年, 11-12頁を参照。
- (28) 村岡健次, 前掲書, 178頁。Burnett はかなり詳しく述べている。1841年当時国内での召使数は11万人(男), 9万2,000人(女)いたという。
- (29) J. Burnett, *Ibid.*, p. 195.
- (30) 1870年以前でも、職種により年50ポンド以上稼ぐ準熟練工もいた。また70年代にもなると、50～90ポンドを稼ぐ準熟練工もかなり増加していく。
- (31) D. J. Oddy, *CHB*, p. 271.
- (32) *Ibid.*, pp. 268-71.
- (33) M. Anderson, *Ibid.*, p. 16.
- (34) *Ibid.*, p. 17.
- (35) J. Burnett, *Ibid.*, pp. 260-61.
- (36) *Ibid.*, p. 262.
- (37) *Ibid.*, p. 263.
- (38) 宇多和子, 食生活史『ジェイン・エア』開文社出版, 1997年, 124頁より食品紹介としてそのまま引用している。
- (39) J. Burnett, *Ibid.*, pp. 277-78.
- (40) Thad Logan, *The Victorian Parlour* (Cambridge UP, 2001), p. 18 の概説を参照。
- (41) D. Russell, *Popular Music in England in 1840-1914* (Manchester UP, 1997), p. 10 を参照。モリスの表現に次のような箇所がみられる。
'what the "unsophisticated" person takes to is not the fine works of Art, but the ordinary, commonplace, banal tunes which are drummed into his ears at every street corner'.
- 1850年～1860年代の下層労働者の大半は、1890年代では下層中流層に移行している。モリスのこうした発言は、労働者層に対して彼が以前から一貫して抱いていた感情を暗示しているといえないだろうか。
- (42) Fumie TAMAI, "Nationalism and the Shadow of the Declining Empire: Dickens's Journalism and Speeches in the Mid-Fifties" on site, 02/10/7 を参照。Dickens の社会的影響力の背景に、国家主義的色彩が強く忍び寄っていることを示唆している。

